

連続ワークショップ 性なる仏教 第5回 中世女性の苦と救い

開催日時：2023年1月14日（土）13:00-16:00

会場：龍谷大学大宮学舎東コウ 1F アクティビティホール

（及び zoom ウェビナーによるハイブリッド開催）

参加者人数：約 90 人

---

■研究発表

発表1 「墮地獄の諸相—女性が墮ちる地獄—」

南 宏信（佛教大学）

発表2 「写経と女性」

前島 信也（国際仏教大学院大学日本古写経研究所）

■座談会

◆司会 工藤 量導（浄土宗総合研究所）

---

【報告の概要】

中世にいたって初めて紹介された「血の池地獄」は、月経の血で地を穢したという罪によって女性のみが墮ちる地獄である。こうした女性であることそのものが罪であることを示す言説が流布した時代にあっても、女性たちは仏教文化の担い手として活躍し、日本仏教を支えてきた。女性ならではの罪はどのように形成され、原罪を抱えるとされた彼女たちはどのように救われたのか。第5回ワークショップは、救済道の一つとして提示されていた写経事業に焦点を当て、中世に生きた女性の姿を浮き彫りにすることを目指す。

南氏は、『往生要集』における墮地獄の変遷をたどりつつ、その中に女性がどのように関わってきたのか報告した。日本人の地獄観は従来、平安時代の源信著『往生要集』によって形成されたと言われている。ただし、後世には『往生要集』を標榜しながらも、『往生要集』には説かれない地獄がしばしば登場する。その中でも室町時代には、女性のみが墮ちる「血の池地獄」などが説かれるようになる。『往生要集』に説かれる地獄は、人間が住む大陸である閻浮提の下に、等活、黒縄、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、そして阿鼻と、階層的に展開されている。また、それぞれの地獄の中に、十何種類の別所が設けられている。地獄絵図は、お経の見返し部分や絵巻などの様々な場所で描かれた。「北野天神縁起絵巻」「春日権現験記絵」「六道絵」において男女ともに罪人は描かれており、中でも『往生要集』と『地藏十王教』を中心に成立した「六道絵」が現在に至る日本の地獄観念の基礎を形成した。

女性だけが落ちる地獄の典拠として挙げられるのが『血盆経』である。『血盆経』は、10世紀以降の中国で作成された「偽経」である。15世紀の室町時代に日本へ伝来し、亡母追善の善根功德として書写され出し、近年まで広く受容されてきた経典である。内容として、目連が「血盆池」を見たところ、女人たちは極卒らに責めさいなまれていた。その理由は、女人はお産・月経の血で「地神」を穢し、またその服を川で洗うと、誤って善男女がその水で茶を入れて諸聖に供養するので、不浄を致すことになるからである。この地獄を脱するためには『血盆経』を受持し、「血盆勝会」を行い、転誦・写経することが必要だと説かれている。しかし、『血盆経』において女性に付与される「五障」「三従」は仏教的罪業では本

来ないものであった。これについては、「五障」「三従」や「女人禁制」が「女性劣機観」に組み込まれ、特に「五障」「三従」は来世での墮獄に繋がる罪業（「順次生受業」）であるという「女性罪業観」へと変容したことが指摘される。室町時代には「五障」「三従」を女性固有の罪業とする観念が広がりを見せ、社会通年となる。室町時代における女性罪業観の広がりの中で、『血盆経』が伝来し、自身ではどうすることもできない月経の血が仏教的罪業の故であると意味づけられていく。その結果、「血の池地獄」という女性のみが堕ちる地獄が、熊野比丘尼の絵解きなどを通して広く浸透していくことになった。

『血盆経』が日本に受容されて以降、地獄絵図として有名なのが「熊野観心十界曼荼羅」である。これは、熊野三山を本拠地に展開された熊野信仰に関わる絵である。加須屋誠氏が、中世末から近世初期に成立した、わが国の掛幅説話画の歴史の中で最終段階に位置する絵画として位置づけ、伝統的な説話画を継承し、また新たに創作されたイメージを種々取り込むことで画面を構成していることを指摘した。ただし、熊野比丘尼の活動の具体像が明らかになるのは16世紀以降のことである。『血盆経』を基盤とする「血の池地獄」や、「不産女地獄」「両婦地獄」「子は三界の首枷」が描かれている。また、江戸時代中期以降に説かれる「立山曼荼羅」でも「血の池地獄」が描かれる。

最後に氏は、地獄の観念とは、各時代の文化・思想を反映しながら、絶えず変容と定着を繰り返している。女性だけが堕ちる地獄もまた、中世末から形成されてくる女性観が、反映されたものといえるだろうと締め括った。



南 宏信氏

前島氏は、奈良時代から鎌倉時代までの写経の中から、女性が書写の願主であるもの、書写者であるものに注目し、女性と写経の関わりを検討した。6世紀中頃、日本に仏像・経典・仏具が伝来するが、すべての経典が一度に持ち込まれたわけではない。日本では、大陸で作成された「目録」に基づいて経典収集がおこなわれるが、平安後期の「開宝蔵（世界初の刊本大蔵経）」の将来まで完全に揃うことはなかったと考えられている。しかし完全では無いながらも、奈良時代は写経の全盛期となり、二十部以上の「一切経」が書写された。奈良時代写経の代表例に、長屋王経（和銅経・神亀経）、聖武天皇発願経、光明子発願経などが挙げられ、中でも光明子発願経のうち、天平12年書写の五月一日経は天平写経の代表例である。

氏は、まず奈良時代の女性が携わった写経の例を、その願文に注目しながら挙げた。「藤原夫人願経」「光明皇后願経(天平 12 年)」「光明皇后願経(天平 15 年)」「吉備由利願経」「知法一切経」「聖武天皇発願一切経」「仏頂尊勝陀羅尼経天平」など挙げ、奈良時代の写経においては、性差を意識させるようなものは無く、その大半が追善供養のために製作されている。また、奈良後期になるにつれ、やや形式的な願文が作成されたようであることを指摘した。

次に氏は、平安期の女性と写経の形について説明した。奈良期と近い形としては、延暦 17 年の石田女王発願一切経の東大寺への施入が挙げられるが、これは文書にのみ見える記述であり、その詳細は不明である。また天暦 7 年に太皇太后穩子が一切経を供養し、『法華経』8 巻などを自ら書写したとし、天暦 8 年には法性寺塔と併せて一切経を供養している。奈良期には願主と書写者は異なり、書写については専門家が行うという史料が大半であったが、女性自らが書写をおこなうというような記述も平安期において確認できるようになる。大半は追善供養を目的とするが、逆修供養において自筆写経が用いられるようになった。

鎌倉期の女性写経の例として、氏は春日若宮・高山寺尼経を取り上げた。春日若宮大般若経は、女性がひとりで書写したという点が特徴的であり、その供養の対象までも女性を中心としたグループで構成されている点が注目される。高山寺尼経も書式的にも珍しく、一定の女性グループ内で製作されていた。しかし、いずれも追善を主目的とした例であり、当時の写経として大きく相違するものではない。

まとめとして、絶対数としては多くないものの、女性も写経の供養に積極的に関わっていることが指摘できる。奈良期では、少なからず女性を願主とするものも含まれており、性差による内容の相違を確認できていない。平安期では、女性の自筆写経の例も確認でき、「久能寺経」には多数の女性名が記され、深く関わっていた。鎌倉期では、異例だが、女性の一筆写経である春日若宮大般若経が、女性中心の環境の中での廻向例を確認した。また、明恵上人を追善するための写経が、比丘尼によって製作されたことも注目される。現代で想起される写経は「自分で書写する」ものであるが、中世以前は仏像などと同様に施主・願主として書写させることが一般的であり、時代を経て自身で書写を行うことが一般的になっていった。今回取り上げた多くが近親者の追善の例であり、自身の罪障性・往生の祈願ではないものの、そこに非常に価値をおいていたことが確認できた、と締め括った。



前島 信也氏

後半の座談会では、まず司会者が登壇者の発表に対してコメントし、後に参加者からの質問やコメントを取り上げつつ、登壇者間において活発な議論が展開された。「地獄の罪業感の形成において、法然の思考はどのような位置付けはどうなっているのか」、「写経の功德と大蔵経の功德に相違はないのか」、「現在においても『血の池地獄』とされる場所はあるのか、また『血の池地獄』では、罪と救いは常にセットとして考えられるのか」など多数の質問が寄せられた。



左から南 宏信氏、工藤 量導氏、前島 信也氏

(文責 ジェンダーと宗教研究センター)